

母親は子どもの不登校をどのように受け止めていったか

平瀬 由樹¹ 西村 昭徳²

本研究の目的は、母親が子どもの不登校をどのように受け止めていったのか、その心理過程について仮説を生成することを目的とした。不登校経験のある子どもの母親5名にインタビュー調査を行い、心境を中心に当時の様子を語ってもらった。調査により得られた語りのデータを、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析し、39個の概念から22個のカテゴリーに統合、さらに6個の上位カテゴリーにまとめた。その結果、母親が子どもの不登校経験を受け止める心理過程は4期からなっていることが示唆され、以下のような仮説が推察された。まず、1期においてはももとのわが子の印象や不登校への態度が存在する。そして、2期でわが子の不登校開始への様々な反応を示し、3期に入って母親自身の混乱・葛藤状態に関心が高まっていく。だが、4期になると周りに目が向き、取り巻く環境への気づきと受け止めようとする気持ちへの変化がみられるようになる。そして、不登校状態を脱した5期、6期において、不登校期間についての振り返りと事象自体の捉え直しがなされたり、不登校状態を脱したわが子に対して様々な想いを抱くようになるというものである。本結果は、先行研究である小野(1993)、東(2010)の心理過程仮説と近似していたうえ、その他の障害受容過程に関する研究とも共通部分が認められ、理論的妥当性が示唆された。また、今後の支援について、母親がどのような状態にあって、どんな支援を必要としているのかをアセスメントし、信頼関係を築いたうえで、母親や子ども自身の力を活かせるような支援の在り方が必要であるということが考察された。

キーワード：不登校, 母親, M-GTA

問題と目的

文部科学省(2012)の調査では、年間30日以上欠席により不登校状態とされる児童・生徒は112689人と報告されている。前年度からの増減率は減少しているものの、その推移は横ばいであり、我が国における児童・生徒の不登校問題は、未だ深刻なものといえる

不登校による家族への影響

子どもの不登校問題について、その家族は要因ともなり得るが、影響を受ける側となることも想定される。東(2010)は、不登校支援の実践現場と研究者との連携についての報告の中で、近年不登校の子どもをもつ親が、子どもと同様に苦しみ、焦りや不安を抱えながら、自身にできることを探し、具体的な処方箋を求める傾向が強くなっていると述べている。また、中地(2011)は、不登校児の親グループに参加した母親からみた家族システムの変化に関する実証的研究を行い、家族システムの視点から、不登校が「従来の家族システムの見直しを迫り、そして、新たな段階の家族システムを構築していくきっかけ」となる可能性を示

唆している。以上、2つの研究結果だけでも、家族構成員の精神面、家族システムへの影響がうかがわれる。つまり、不登校という現象から家族や一人一人の構成員への多様な影響が考えられ、不登校に直面した家族に関する研究や適切な支援が求められていることがわかる。

不登校の子どもの母親

不登校の子どもをもつ家族に関する研究の中でも、母親に焦点を当てた研究が多くなされている(例えば、酒木・駒井, 1992; 森石, 2011など)。子どもの問題を考えるうえで、子どもにとってより身近な母親との関わりに注目し、母親自身へのアプローチを検討することは、重要な視点である。しかし、わが国における子どもの不登校問題は、1980年前後から「登校拒否」という社会問題として取り上げられ、さらには母親の養育態度を問題化してとりあげられていた(加藤, 2009)。そして、「母原病」と取りざたされていたこともあり、その考え方が現在も世間に少なからず残っていて、母親の孤立や罪悪感を強める一因となっていることが予想される。板橋(2000)は、不登校児の母親における子どもへの関心や愛情が自己実現に影響していくことを示唆したうえで、今後の支援について、母親を責めるのではなく、母親を支援するというスタン

1 東京成徳大学大学院

2 東京成徳大学

スで母親の変化を見守るという姿勢の必要性を指摘している。以上のことから、子どもの不登校を母親がどのように受け止めていくのか、その母親の心理過程を理解していくことは、今後子どもだけでなく、母親を支えるという真の意味での不登校支援を行うための一助となると考えられる。

不登校の子を持つ親の心理過程

東(2010)は、今後不登校の子を持つ親の心理過程、変容およびそれらへの援助方法に資することのできる研究が求められると述べ、実践活動に基づく心理過程の仮説を提示している。具体的には、第1段階：不安・混乱期、第2段階：原因・責任探し期、第3段階：振り返り期、第4段階：協働期となっている。同様に、小野(1993)も以下のような過程を提示している。すなわち、I. 不安・混乱期、II. 責任回避期、III. 模索期、IV. 解決方向模索期、V. 方法模索期、VI. 変化期、VII. 問題の積極受容期、VIII. 親自身の成長期の8段階である。ただし、これらの研究で示された心理過程は実践活動より筆者らが導き出した仮説であり、仮説生成のための方法論を用いたものではない。研究者が探した限りでは、実践活動を通じた心理過程の研究は多いが、仮説生成の方法論を用いた研究は少ない。

よって本研究では、不登校児童生徒の母親にインタビュー調査を行い、母親が子どもの不登校をどのように受け止めていったのか、その心理過程について、仮説を生成することを目的とする。

方 法

調査対象者及び調査時期

2014年7月～9月に、縁故法により協力を依頼した不登校経験のある子どもの母親5名³(Table1)を対象に、半構造化面接によるインタビュー調査を行なった。

Table1 インタビュー協力者の詳細

母	家族構成	不登校経験者	不登校時期 (不登校状況)
A	夫、長男、次男	長男、次男	長男：高校2年(高校中退、その後進学) / 次男：中学1～3年(時折登校)
B	長男	長男	中学2年、約3か月間(ほぼ登校せず)
C	夫、長男、長女	長女	中学1～3年(ほぼ登校せず)
D	夫、長女、義母	長女	中学2年(時折登校)
E	(夫/期間中に逝去)、長男、長女、次男	長男	小学3年～中学1年(ほぼ登校せず)

3 お忙しい中、インタビュー調査にご協力いただいたお母様方に、心より御礼申し上げます。

調査内容

子どもが不登校状態に陥った時期から現在までを振り返り、母親の心境を中心に、子どもの状態、家族や周りの人々との関わり、印象に残っていることや転換点などを聞いた。

手続き

調査者が協力者に連絡をとり、面接日時や場所を決めた。場所は協力者が出向きやすい公共の場を提示し、選択してもらった。面接を開始する前に研究についての説明を行い、同意を得たのちインタビューを開始した。時間は1時間から1時間30分程度を要した。質問内容は以下のとおりである。①家族構成の確認、②「お母様の当時の心境を中心に、不登校期間についてお話をいただけますか」、③「期間中のご家族との関わり、どなたか関わりがあった方について教えていただけますか」、④「お母様の中で、何か印象に残っていることや転換点のようなことはありましたか」なお、質問の内容や順序などは、協力者の自由な語りに合わせて変更することもあった。

倫理的配慮

倫理的配慮のため、面接場所はインタビュー内容が第三者に聞かれることのない場所を選び、面接開始前に説明を行った。①調査者の所属の明示、②調査協力による不利益等がないことの説明、③個人情報の保護およびデータの管理についての説明、④インタビュー中断や論文掲載の取り下げに関する自由についての説明、以上の4項目について同意を得た。また、もしも何か不利益や影響があった場合はすぐに連絡が取れる状態であることを説明し、所属相談機関の説明も行った。なお、調査は所属機関における倫理審査の承認を得て行われた。

分析過程と結果

分析方法には、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下、M-GTA)による質的分析法を採用し、田村・石隈(2007)を参考にTable2の手順で

Table2 分析の手続き

STEP	分析	手続き
1	インタビュー逐語の概念化	インタビュー内容を文脈や意味のまとまりで区切り、抽象的な概念へまとめ、定義を決定する。
2	カテゴリへの統合	概念からカテゴリへと統合し、カテゴリをさらに上位カテゴリ・グループにまとめる。
3	カテゴリ間の関係	カテゴリ間関係を検討し、関係図を作成する。

母親は子どもの不登校をどのように受け止めていったか

Table3 STEP1で生成した概念名とその定義

	概念名	定義
1	不登校原因の考察	母親なりに不登校が始まった原因について考察している。
2	サポート資源に対する不満と今後への期待	サポート資源に対する不満や今後への期待。
3	不登校前のわが子に対するポジティブな印象	不登校前に母親が持っていたわが子についてのポジティブな印象
4	不登校前のわが子に対するネガティブな印象	不登校前に母親が持っていたわが子についてのネガティブな印象
5	不登校開始時に理解を示すことができなかつたという後悔や反省	不登校開始時のわが子に理解を示してやれなかつたことを後悔したり反省したりする気持ち。
6	わが子や母親自身を取り巻く関係性についての気づき	わが子の不登校を経験したことで、子どもや母親自身を取り巻く関係性について気づいたこと。
7	同様の経験をした人に対する共感的な気持ち	同様の経験をした人だからこそ分かる心境をさまざまな形で共有し、共感的な気持ちを抱いている。
8	わが子をありのまま受け止めようとする気持ちや姿勢	母親の、わが子のありのままの状態を受け止めようとする気持ちや姿勢
9	不登校後の「もう大丈夫なんだろうか」という心配	不登校状態を脱した後の「もう大丈夫なんだろうか」というような心配な気持ち。
10	自分の子育てに対する覚悟や姿勢の振り返り	自分がいかに子育てをしてきたか、どのような覚悟で子育てをしてきたかを振り返っている。
11	わが子との関わりの中で生じた戸惑いや不安	不登校中のわが子との関わりの中で生じた「どうしたらいいんだろう」という戸惑いや不安な気持ち。
12	わが子をどうにもしてやれない無力感やもどかしさ	不登校中のわが子を前に感じた「どうにもしてやれない」という無力感やもどかしさ。
13	周りの目を気にする気持ち	分かってもらえない、恥ずかしいなど、周りの目を気にする気持ち。
14	わが子の不登校をショックに思う気持ち	「まさかわが子が不登校になるなんて」といったショックな気持ち。
15	自責的な気持ち	不登校の原因について、自分の子育てや親としての関わりなどを振り返って自責的になっている様子。
16	『不登校』という事象の捉え直し	実際の経験を経てからの、『不登校』という事象に対する母親なりの理解や捉え方。
17	気丈に振舞おうとする気持ち	『私がしっかりしないと』というように気丈に振舞おうとする気持ち。
18	わが子の不登校を受け入れられなさ	不登校になったわが子の状態や気持ちを理解できない、受け入れられないという気持ちと起こした行動。
19	不登校開始をあまり重く捉えていない様子	不登校開始直後のわが子の状態をあまり重く捉えていない様子。
20	不登校状態脱却の実感	わが子が不登校状態を抜けたのだと実感した様子。
21	不登校経験を糧に成長してほしいという願い	不登校の経験を糧に、これから先成長してほしいというわが子に寄り添うような気持ち。
22	わが子の様子から気持ちを察する様子	不登校中のわが子の様子を見て、その気持ちを察している。
23	受け入れられないという気持ちの変化	それまでの『不登校』に対する否定的な気持ちだが、きっかけを経て変化し、これまでを省みたり理解を示そうとしたりしている。
24	母親自身の混乱や動揺	わが子が不登校状態に陥ったショックから母親自身が混乱し、動揺している様子。
25	サポート資源に対する感謝の気持ち	サポート資源の支えを実感し、感謝する気持ち。
26	サポート資源の支えによって安定した母親の気持ち	サポート資源の支えを実感し、母親の気持ちが安定していつている。
27	サポート資源を頼ることの躊躇	サポート資源に頼ることを躊躇する気持ち。
28	『不登校』という事象のもともとの捉え方	母親のもともとの不登校に対する考え方
29	不登校解決方法の模索	不登校を解決するため(脱するため)に様々な方法を思案している。
30	不登校期間に対するネガティブな振り返り	不登校期間を振り返り、ネガティブな印象を持っている
31	不登校中に感じた親としての心配	不登校中に感じたわが子の体調や今後への影響を心配する気持ち。
32	不登校中に得られた一時的な安心感	不登校中に得られた一時的な安心感。
33	ほかの子どもと同じように今を楽しんでほしいという願い	不登校中のわが子に対して周りの子どもと同じように学校へ行って、楽しんでほしいという母親の願い。
34	わが子に対する絶対的な信頼感	不登校中にも感じていたわが子に対する信頼感
35	わが子の不登校に対する肯定的な態度	わが子の不登校に対する肯定的な態度
36	不登校期間に対するポジティブな振り返り	不登校期間中を振り返り、ポジティブな印象を持っている。
37	不登校経験後のわが子の成長の実感	不登校経験を経たわが子の成長を実感している。
38	不登校後も残るわが子との関係への不安	不登校後も、今後のわが子との関係に不安を抱いている様子。
39	休むことの必要性をわが子に伝えられなかつたという後悔	休むことの必要性をわが子に伝えられなかつたという後悔

Table4 概念、カテゴリー、カテゴリー・グループの分類

カテゴリー・グループ	カテゴリー	カテゴリーに含まれる概念 (該当協力者)
1 もともとのわが子の印象 や不登校への態度	1 『不登校』という事象のもともとの捉え方	『不登校』という事象のもともとの捉え方 (B,D)
	2 不登校前のわが子に対する印象	不登校前のわが子に対するポジティブな印象 (A,B,D,E) 不登校前のわが子に対するネガティブな印象 (A,C,D,E)
2 わが子の不登校開始への 反応	3 不登校による大きな衝撃と受け入れがたさ	わが子の不登校をショックに思う気持ち (A,E) わが子の不登校を受け入れられなさ (A,B,E)
	4 不登校開始をあまり重く捉えていない様子	不登校開始をあまり重く捉えていない様子 (B,C,D,E)
	5 わが子の不登校に対する肯定的態度	わが子の不登校に対する肯定的な態度 (E)
3 母親自身の混乱・葛藤状 態への関心の高まり	6 母親自身の混乱と精神不安定状態	周りの目を気にする気持ち (A,B,E,D) 母親自身の混乱や動揺 (A,B,C,D)
	7 心配と安心という両面的な気持ちの維持	不登校中に感じた親としての心配 (C,D) 不登校中に得られた一時的な安心感 (C,E)
		ほかの子どもと同じように今を楽しんでほしいという願い (E)
	8 不登校を契機とする回顧と自責	不登校原因の考察 (A,B,C,D,E) 自分の子育てに対する覚悟や姿勢の振り返り (A,C) 自責的な気持ち (A,B,C,D)
	9 わが子と関わる中で生じた戸惑いや無力感	わが子との関わりの中で生じた戸惑いや不安 (A,B,C,D,E)
		わが子をどうにもしてやれない無力感やもどかしさ (A,C,D)
	10 不登校解決のための苦悩	サポート資源を頼ることの躊躇 (A,D,E) 不登校解決方法の模索 (B,C)
11 わが子に対する絶対的な信頼感	わが子に対する絶対的な信頼感 (D,E)	
4 取り巻く環境への気づき と受け止めようとする気 持ちへの変化	12 他者の支えによる精神的安定	同様の経験をした人に対する共感的な気持ち (A,E) サポート資源の支えによって安定した母親の気持ち (A,B,C,E)
	13 受け入れられないという気持ちの変化	受け入れられないという気持ちの変化 (A,B)
	14 わが子をありのまま受け止め寄り添う気持ち	わが子をありのまま受け止めようとする気持ちや姿勢 (A) 気丈に振舞おうとする気持ち (A)
		わが子の様子から気持ちを察する様子 (A,B,C,D,E)
	15 サポート資源に関する気づき・感謝・不満	サポート資源に対する不満と今後への期待 (A,B,D,E) わが子や母親自身を取り巻く関係性についての気づき (A,B,C,D,E) サポート資源に対する感謝の気持ち (A,B,C,D,E)
5 不登校の振り返りと事象 の捉え直し	16 不登校開始時に理解を示すことができなかつたという後悔や反省	不登校開始時に理解を示すことができなかつたという後悔や反省 (A,C,D)
	17 休むことの必要性をわが子に伝えられなかつたという後悔	休むことの必要性をわが子に伝えられなかつたという後悔 (E)
	18 不登校期間の振り返り	不登校期間に対するネガティブな振り返り (B,D) 不登校期間に対するポジティブな振り返り (E)
	19 『不登校』という事象の捉え直し	『不登校』という事象の捉え直し (A,B,D)
6 不登校を脱したわが子へ の想い	20 不登校を乗り越え成長したことの実感	不登校状態脱却の実感 (A,B,C,D,E) 不登校経験後のわが子の成長の実感 (A,B,D)
	21 不登校後も残る不安や心配	不登校後の「もう大丈夫なんだろうか」という心配 (A,D) 不登校後も残るわが子との関係への不安 (C,D)
	22 不登校経験を糧に成長してほしいという願い	不登校経験を糧に成長してほしいという願い (A,B,D)

分析を進めた。なお、分析は調査者のほか、心理学専攻の大学院生数名に協力を依頼した。さらに、各概念、カテゴリー、ストーリーラインや関係図をインタビュー協力者1名に見てもらい、修正を加えた。

(1) STEP1

初めに A さんのインタビュー内容を概念化し、一通り概念を作成してから、順次 B さん以降の概念化を行った。その際、ヴァリエーションや概念名、その

定義が妥当であるかどうか、第三者のチェックを受け、ワークシートにまとめた。その結果、39個の概念が生成された (Table3)。

(2) STEP2

次に、STEP1で作成した概念を統合し、22個のカテゴリーを得た。さらに、カテゴリー・グループへの統合を行い、6個のカテゴリー・グループを得た (Table4)。

母親は子どもの不登校をどのように受け止めていったか

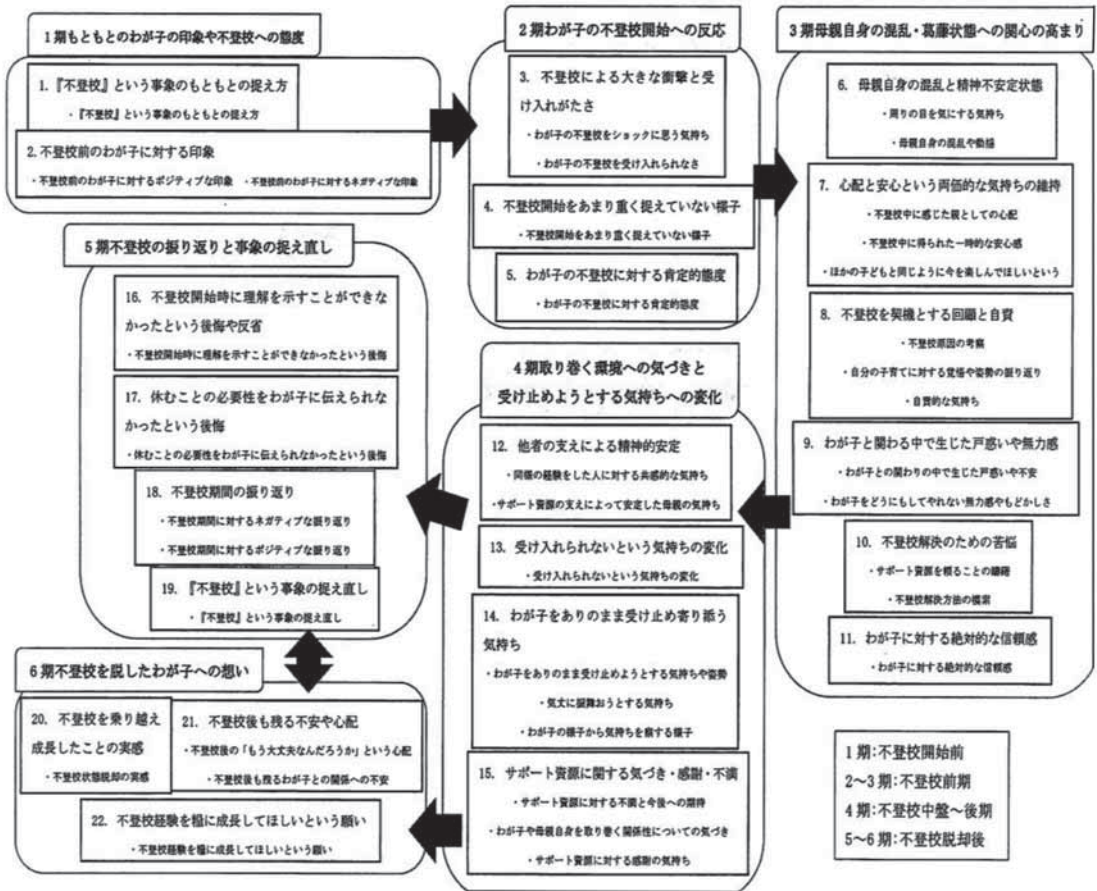


Figure 1 関係図

(3) STEP3

STEP2までの結果から、母親がわが子の不登校を受け止めていく心理過程を示した関係図 (Figure1) を作成し、以下のストーリーラインを仮定した。なお、必ず全過程を経験するとは限らず、段階を前後することも考え得る。

以下、【】は、カテゴリー名を引用したものである。

1期 もともとのわが子の印象や不登校への態度 わが子の不登校が始まる以前の母親の【1. 『不登校』という事象のもともとの捉え方】や【2. 不登校前のわが子に対する印象】が存在し、それぞれポジティブなもの、ネガティブなものがある。

2期 わが子の不登校開始への反応 子どもがちよっとしたきっかけから欠席することが増え、不登校を意識し始めると、母親に「まさかわが子が」という【3. 不登校による大きな衝撃と受け入れがたさ】が生じる。そして、その気持ちが登校を促す行動としても現れる。たとえば、朝無理やり起こしたり登校させたりするなどである。それから、まだこの段階では【4. 不登校開

始をあまり重く捉えていない様子】の母親もあり、「ただの体調不良だろう」「行けばいいのに」といった気持ちを抱くようである。また、その一方で【5. わが子の不登校に対する肯定的態度】をもつ母親もあり、子どもの気持ちを察して「無理に行かせない方がいい」という姿勢とる様子がうかがわれた。

3期 母親自身の混乱・葛藤状態への関心の高まり

子どもの不登校を受け、この段階では自己の内面に注意が集中する。たとえば、周りの目を気にしたり「分かってもらえない」という気持ちの高まりから、パニックや不眠状態を呈するといった【6. 母親自身の混乱と精神不安定状態】が生じる。なお、わが子の不登校に肯定的な母親では、「子どもを休ませる必要があることをわかってもらえない」という状態が見受けられる。

そして、子どもの体調面や登校状況などに対して、【7. 心配と安心という両価的な気持ちの維持】が起これ、不安定な状態となる。たとえば、不登校中でも通院できたことで安心したり、逆に学校行事に参加できなかったけれども、再び登校しなくなったことを心配したり、子どもの様子に一喜一憂する状態といえる。さらに【8. 不登校を契機とする回顧と自責】が起これ、不

登校の原因について考え、自分の子育てへの覚悟や姿勢を振り返り、「自分が〇〇してしまったから」などと自分を責めるといった内面的な動きがみられる。加えて、【9. わが子と関わる中で生じた戸惑いや無力感】に苛まれることとなり、親としてどうしたらよいか分からない、何もしてやれないという気持ちを体験する。そこから、【10. 不登校解決のための苦悩】が始まって、方法を模索していくが、上記の「分かってもらえない」という気持ちや自責的な気持ちから、サポート資源に頼ることを躊躇したり方法を実行に移せなかったりする様子が見られる。そんな中でも、「この子なら何とかできるだろう」といった【11. わが子に対する絶対的な信頼感】をベースにもつ母親もいる。

4期 取り巻く環境への気づきと受け止めようとする気持ちへの変化 この段階になってくると、母親は自分の内面的な動きだけでなく、取り巻く環境に目を向けるようになるため、サポート資源やわが子と関わり、母親の心境にも変化がみられる。たとえば、他者の励ましやカウンセリングを受ける、同様の経験をした人の話を聞いて共感的な気持ちを抱くといった【12. 他者の支えによる精神的安定】がもたらされる。周りに目を向け、気持ちが安定していくことで、子どもの状態についてより客観的にみることができるようになり、【13. 受け入れられないという気持ちの変化】が生じてくる。そして、【14. わが子のありのままを受け止め寄り添う気持ち】が見受けられるようになり、子どもの気持ちを慮り不安を受け止めようと努める。中には、子どものありのままを受け止めるために、自分自身の精神状態を安定させることの大切さに気づいて心がける母親もいる。また、周囲に目を向け、サポート資源を活用しようとしたり、実際に活用したりすることで、【15. サポート資源に関する気づき・感謝・不満】などを実感することとなる。すなわち、環境要因としての他者の存在がどれだけ影響を及ぼすかということに気がついたり、支えてくれた家族・友人・学校などに対する感謝の気持ちを感じたり、逆に物足りなさや嫌悪感などの不満を感じ、「今後このようになってほしい」と期待を寄せるようになる。

5期 不登校の振り返りと事象の捉え直し この段階では、わが子の不登校後、当時の自分の言動を後悔したりする。具体的には【16. 不登校開始時に理解を示すことができなかったという後悔や反省】をしたり、わが子の不登校に肯定的な母親は、【17. 休むことの必要性をわが子に伝えられなかったという後悔】を感じたりする。また、【18. 不登校期間の振り返り】がなされていく。「封印している」「暗くてしんどい時期」とネガティブに振り返る人もいれば、子どもが家にいたことで、会話や食事など、親子の時間を楽しめたとポジティブに振り返る人もいる。それから、【19. 『不登校』という事象に対して捉え直し】がなされており、世間

で起こることに他人事ではないと感じたり、不登校となる子どもの傾向について母親なりに理解を示したりすることが可能になる。

6期 不登校を脱したわが子への想い 子どもの再登校や進学、あるいはわが子のたくましい言動を見て、【20. 不登校を乗り越え成長したことの実感】を得る。しかし、【21. 不登校後も残る不安や心配】はあり、「もう大丈夫なのだろうか」と様子をうかがっている。また、不登校中に明らかとなった親子の関係性に変化が見られず、そこに不安を感じる母親もいる。ただ、そのような不安や心配を抱えながらも【22. 不登校経験を糧に成長してほしいという願い】を抱き、親としてわが子の今後の成長を見守ろうとする姿勢へと移っていく。

考 察

本研究では母親が子どもの不登校をどのように受け止めていったのか、その心理過程の仮説を生成することを目的としていた。その結果を以下に考察する。

受け止めのプロセス（心理過程）

本研究において、母親がどのようにわが子の不登校を受け止めていったかという心理過程の仮説が以下のように示された。まず1期においてももとのわが子の印象や不登校への態度が存在し、2期でわが子の不登校開始への様々な反応を示す。そこから、3期に入って母親自身の混乱・葛藤状態に関心が高まるが、4期になってくると周りに目が向き、取り巻く環境への気づきと受け止めようとする気持ちへの変化がみられるようになる。そして、不登校状態を脱した5期、6期において、不登校期間についての振り返りと事象自体の捉え直しがなされたり、不登校状態を脱したわが子に対して様々な想いを抱いたりする、というものである。以上のように、本研究において示された心理過程は、先に挙げた小野（1993）、東（2010）の心理過程の仮説と比較しても、共通部分がみられる。具体的には、小野（1993）における「不安・混乱期」、「責任回避期」、「模索期」、「解決方向模索期」、「方法模索期」、「変化期」の6段階、東（2010）における「不安・混乱期」、「原因・責任探し期」、「振り返り期」、「協働期」の4段階すべてが、本研究の心理過程と一致していると思われる（Table5）。よって、先行研究で示された仮説を基準に判断すると、本研究で生成された仮説は、理論的に妥当であると考えられる。なお、段階の差異については、サンプル数や母集団、プロセスの開始と終了の時期設定などの違いによるものと推察される。以下、段階ごとに詳細に考察する。

1期 もともとのわが子の印象や不登校への態度 1期は子どもの不登校開始前であり、特定の時期や期間ではない。母親の抱くわが子の印象、つまりわが子像

がポジティブなものであれば、不登校開始後の母親が受ける衝撃は大きなものとなる。当然、1人の子どもに対してネガティブな印象を抱くこともあり、3期に「わが子のこういうところが不登校につながったのではないか」と原因に挙げる様子がうかがわれる。また、『不登校』という事象自体に対しても、様々な捉え方があり、それが不登校開始後の母親の心境にも影響を与えることが推察される。ただし、母親が『不登校』を肯定的に捉えていたとしても、実際のわが子の不登校についての捉え方が肯定的になるとは限らないということも母親の語りから示唆されている。以上のことから、1期で母親が抱くわが子および『不登校』に対する印象は不登校開始後の衝撃の大きさや母親の気持ちの変動に影響を与える要因の1つであると考えられる。よって、支援のために関わっていく際に、母親がわが子に対して、あるいは『不登校』に対してどのような印象を持っていたのかを知ることは、母親の精神的な不安定さを理解していくことに役立つであろう。

2期 わが子の不登校開始への反応 ここでの反応の大きさには個人差がみられる。わが子像が優秀であったり人間関係を良好に保っている様子を知っていたりする母親にとっては、衝撃が大きく、受け入れがたいものになることが容易に想像できるであろう。逆に、もともと休みがちであったり人間関係における不適応や過剰適応を気にかけていたりした母親であれば、肯定的に捉える可能性も考え得る。また今回、「そのうちどうにかなるだろう」とあまり重くとらえない母親も見受けられたが、これは受け入れたくないという否認の気持ちが働いているとも考えられる。以上のことから、母親の不登校に対する反応の仕方、大きさには、子どもの状態像、母親の性格傾向や物事の考え方、環境など、様々な要因が絡み合っただけで作用していることが予想される。

小野（1993）や東（2010）では、母親の初期の反応について、本研究における3期とひとまとめになっていたりと、肯定的に捉える反応についての言及がされていないかたがとある。よって、状態として類似している障害や疾患の受容段階説におけるショック段階（六鹿、2003など）と比較すると、その反応は近似しているが、『肯定的に捉える』という反応についてはやはり不登校特有なものと考えられ、今後研究を進めていく必要があると考える。

3期 母親自身の混乱・葛藤状態への関心の高まり 3期は、子どもの不登校状態が継続し、周りの目を気にして、理解が得られないと感じたり他者の声掛けに猜疑的になったりしてしまう段階である。そして、過去を振り返って反省し、自分を責め、状況改善のための方法を模索して苦悩する。また、わが子とどう関わってよいのか分からない、あるいは何もしてやれないといった気持ちが生じることで、母親の葛藤が大き

くなっていく。小野（1993）は、同様の段階について、困惑と今後の不安にとらわれ、精神的に疲労し、感情統制ができない段階と説明しており、本研究でもその様子がうかがわれる。しかしその一方で、子どもの不登校に戸惑いつつも、わが子の性格やこれまでの成長過程を振り返り、揺らがない信頼を持って「この子なら大丈夫」と思っている母親もいるということが示唆された。以上のことを踏まえると、この段階では回顧、混乱、戸惑い、無力感など母親の内面的な動きが活発になることが分かるが、わが子への信頼感を強く感じている母親はその程度がやや小さいように思われる。このことから、この段階における母親の支援を考えたときに、母親自身の内面的な動きに注視しながら信頼関係を築いていき、わが子の素質やもとの関係性に目を向けさせていくことが必要であると考えられる。

4期 取り巻く環境への気づきと受け止めようとする気持ちへの変化 4期は、周りに目を向けることができ、他者の支えを受け入れたり、『不登校』について理解しようと行動することが可能となる。それゆえに、サポート資源との関わりをもって様々な感情を抱いたり、子どもの気持ちを慮ったりということが起こってくる。菊池・岡本（2009）が検討した、統合失調症患者の親におけるケア役割の受容過程と比較すると、『交流（他の家族や患者との交流を通じ、安心感や見通し、他者の視点を獲得する作業）』と『視点の獲得（ケアや子どもの状態を理解する視点を獲得し、自己の中に定めた状態）』に通ずると思われる。また、東（2010）における協働期とも共通点が見られ、先行研究と一致する仮説が示された。

姜・酒井（2006）は、子どもの認知する親の養育態度と学校適応との関連についての検討において、以下のようなことを述べている。すなわち、親側の養育態度2因子のうち、第1因子「受容」は、学校適応4因子のうち、第1因子「授業場面での適応」、第2因子「規則・ルールへの適応」、第4因子「肯定的自己像」に正の影響を与えるということである。このことを不登校の子どもの場合に置き換えれば、母親がわが子のありのままを受け止めようとすることは、子どもの自己肯定感を高め、状態改善の可能性が考えられる。さらに、もしそこで再登校することができて、母親の受容が安定して存在すれば、子どもの学校適応感を高め、継続した再登校状態を保てるかもしれない。したがって、この段階において、母親の気持ちやわが子のありのままを受け止めようとして変化していくことは非常に重要であると考えられる。

また、この段階では母親の内面から周囲に視点が変わっているが、そのきっかけをわが子とのやりとりの中に明確に持つ人もいる。たとえば、それは母子で大喧嘩をして気持ちをぶちまけることであったり、子

もの気持ちが綴られたメモを目にすることであったりする。つまり、直接的あるいは間接的にわが子の気持ちを知ったり、状態を目の当たりにするということが、そのきっかけとなる可能性をもっていると言えよう。

5期 不登校の振り返りと事象の捉え直し 5期では、不登校期間中を「辛かった」「思い返したくない」と振り返る母親と、親子の時間を楽しむことが出来たと振り返る母親がいた。林(2008)は、不登校について、思春期の子どもと中年期の親の心理発達の課題、特に分離不安という視点で検討を行い、その結果、不登校の長期化の要因ともなり得る依存的融合状態は、特に親側が分離に伴う喪失感や寂しさの感情をいかに気づき、それを抱えるかということが重要であると述べている。また根本(2014)は、思春期の子どもの『不登校』を“一旦休止”と捉え、その期間が新たな自分を創造する移行空間として使用され、子ども自身やその親との関係の見直しを通して健康な成長を遂げることを示唆している。このようなことから、母親の振り返りを親子関係の見直しという視点で見ると、不登校期間中のわが子との情緒的交流が辛かった人はネガティブに感じ、あるいは母子に必要な情緒的交流をその期間中に行うことができた人はポジティブに感じたというような捉え方もできるのではないだろうか。

6期 不登校を脱したわが子への想い 6期は、不登校状態を脱したわが子を心配しつつも、言葉や姿から成長を感じたり、不登校期間に対してネガティブな振り返りをしつつも、その経験を糧にしてほしいと願ったりする様子うかがわれた。この段階で、注目すべきはわが子との関係性への不安が語られていることである。不登校期間中に、子どもが母親に対し気持ちをぶつけるということが生じた人もいれば、そうでない人もいる。そうでない人の場合、子どもが何を考えたり思ったりしているのかが分からず、それを共有できない関係性について不安を抱くであろう。このことは、不登校状態を脱しても、先の根本(2014)の示唆した『親子関係の見直し』が途中である、あるいは不十分であるために不安が残っている状態と捉えることができるのではないだろうか。

母親支援に向けた示唆

本研究において明らかとなった、不登校の子どもを母親が受け止めていくプロセス、および母親たちの声から考えられる今後の母親支援について以下に述べる。

まず、インタビューの内容から支援を考える。サポート資源に対して、「(学校からの)余計な介入がなかっただけマシだった」といった不信感がうかがわれる発言や、相性のよいカウンセラーと出会えたり、友人が背中を押してくれたりしたことなどの信頼関係についての語りが見られたことから、支援のために何よりも

まず信頼関係を築くことが前提となることは推測できる。これに関連して、東(2010)は支援する実践者が連携上のつなぎの場面で、対象者である子どもや親からの拒否や抵抗に直面し、関係が断絶してしまうことがあると指摘しており、このことから信頼関係の重要性は明らかである。それから、同様の経験をした(している)人とのつながりを求める母親もおり、活用可能なコミュニティやサポート資源が少ない母親に対して、学校やスクールカウンセラー(以下SC)などがそういったつながりを提供していくことの必要性がうかがわれる。そしてそれが、母親の精神的な安定につながり、ゆくゆくは支援者との信頼関係にもつながっていくと考えられる。

次に、プロセスから考えられることは、母親の心境がどの段階にあるのかをアセスメントすることの重要性である。たとえば、関係図の3期辺りでは、まず母親自身へのメンタルケアが必要となるであろう。4期辺りであれば、母親の考えに耳を傾けながら、どのようなサポート資源を活用していくことができるかを一緒に考え、背中を押すことができるであろう。東(2010)は連携が過剰支援となる可能性について触れ、社会による過保護や過支援が進み、新たな“不適応児という概念の誕生”を危惧している。また、田村ら(2007)が行った、保護者が子どもの援助のパートナーへと変容していく過程の検討によれば、援助者が子どもの自助資源に着目し、それを肯定することは母親が子どもを受け入れることに影響を及ぼすことを示唆した。そしてさらには、母親自身の自助資源に支援者が着目することが母親自身に肯定感を持たせ、心理的変容を促進することを示唆している。以上のことから、母親や子どもの力、自助資源を尊重し、サポート資源を活用していくのがあくまでも母親あるいは子どもであるという視点で支援を行っていくことの重要性がうかがわれる。これは、インタビュー協力者の「お母さん自身の『コミュニティを活かす力』が大切」という言葉にも表れていた。

以上、協力者である母親たちの声とプロセスから考えられる支援について述べたが、これらの支援を実際の現場で行っていく際に本研究において示唆された母親の心理過程を念頭に入れておくことは、アセスメントや実際の支援をより充実したものにするための一助になると考える。

そして最後に、今回の研究でSCがサポート資源として挙げられなかったことについて、うまく活用されていない可能性は拭いきれないが、母親あるいは子どもが自身のコミュニティを活かして乗り越えていったため、ということも考えられる。よって、今後SCは支援を行っていく上で、この視点を取り入れた活動をしていくことが必要であろう。また、SCが提供可能なコミュニティのレポトリを増やし、そのコミュ

ニティについて情報を得ておくことも非常に重要な点である。

今後の課題

今回分析方法として用いた M-GTA では、概念を 20～30 程度、カテゴリーを 10 程度、最終的にカテゴリー・グループをその 5、6 程度にまとめることが一般的である。しかし、今回の研究ではあえて分類数を多くすることにした。その理由は、分析過程で、母親の不登校に対する姿勢、つまり肯定的か否定的かということが心理過程に大きく影響していたためである。しかし、それらは共通している部分も多く、完全に分離したものではなかったため、今回の研究では、異なっているところをプロセスの中に活かした方が良いと判断した。そのため、今後研究を進めていく際には、サンプリングの時点で条件を可能な限り、統制していく必要があるであろう。加えて、わが子の不登校に肯定的な母親の心理過程を明らかにしていくことは、そのような考え方をもち母親を孤立させず、信頼関係を築きながら連携をとっていくことを考えるための手がかりになるであろう。今後の研究の発展が望まれる。

引用文献

- 林 郷子 (2008). 不登校の親子関係についての一考察—子どもの思春期課題と親の中年期課題との相互作用から—。奈良大学大学院研究年報13, 1-11.
- 東 宏行 (2010). 教育心理学と実践活動—研究者と教育機関の連携—不登校支援の実践現場との連携から—。教育心理学年報49, 180-189.
- 板橋登子・佐野秀樹 (2004). 不登校児の母親についての研究の現状と課題。カウンセリング研究37 (1), 74-84.
- 板橋登子 (2000). 不登校児をもつ母親の養育態度と自己像。カウンセリング研究33 (1), 8-17.
- 姜 信善・酒井えりか (2006). 子どもの認知する親の養育態度と学校適応との関連についての検討。富山大学人間発達科学部紀要1 (1), 111-119.
- 加藤美帆 (2009). 「不登校」からの家族秩序への問い直し—母親へのインタビューから—。ジェンダー研究12, 93-105.
- 菊池由莉・岡本祐子 (2009). 統合失調症間ジャンの親におけるケア役割受容過程の検討。広島大学心理学研究9, 217-227.
- 文部科学省 (2013). 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査—小・中学校の不登校の状況, <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001051654&cycocode=0> (2014年2月9日閲覧).
- 森石加世子 (2011). 母親の子どもからの分立のプロセス—不登校の中学生の母親面接を通して—。心理臨床学研究29 (5), 598-609.
- 六鹿いづみ (2003). 統合失調症の家族の受容過程。臨床教育心理学研究29 (1), 21-29.
- 中地展生 (2011). 不登校児の親グループに参加した母親からみた家族システムの変化に関する実証的研究。心理臨床学研究29 (3), 281-291.
- 根本眞弓 (2014). 「西の魔女が死んだ」に見る不登校を呈する思春期女子の心理—精神分析・対象関係論の観点から—。大阪樟蔭女子大学研究紀要4, 23-32.
- 小野 修 (1993). 不登校児の親の変化過程仮説—パーソンセンタード・アプローチ—。心理臨床研究10 (3), 17-27.
- 酒木 保・駒井厚子 (1992). 不登校児の母親面接。情緒障害教育研究紀要11, 1-6.
- 田村節子・石隈利紀 (2007). 保護者はクライアントから子どもの援助のパートナーへとどのように変容するか—母親の手記の質的分析—。教育心理学研究55 (3), 438-450.

—2015. 1. 30受稿, 2015. 3. 7受理—

How Did Mothers Receive Their Children's School Non-Attendance ?

Yuki HIRASE (*Graduate School of Psychology Tokyo Seitoku University*)

Akinori NISHIMURA (*Graduate School of Psychology Tokyo Seitoku University*)

The purpose of this study was to hypothesize psychological process that the mothers receiving child's school non-attendance. An interview investigation was performed for 5 mothers of children who have experienced school non-attendance, and had talked about its period around feelings at that time. Using the Modified Grounded Theory approach, the interview of mothers was analyzed. 39 concepts were extracted and organized into 22 categories, which were further summarized in 6 higher-level categories. As a result, it was suggested that the psychological process that mothers receiving the child's school non-attendance was composed of 4 periods, and the following hypothesis was guessed; (1) The child's impression and the attitude to a school non-attendance, (2) Variety reactions of mother by the start of her child's school non-attendance, (3) Growing interest in the mother's own state of confusion and conflict, (4) The awareness of the surrounding environment and changes to the feeling that trying receiving, (5) To recall the period and to rethink a phenomenon about the school non-attendance, (6) Various feelings for child who got over the school non-attendance.

Keywords: school non-attendance, mother, M-GTA

Bulletin of Clinical Psychology, Tokyo Seitoku University

2015, Vol. 15, pp.129-138